

指方立相思想の歴史的研究

菅 原 達 孝

- (一) 西方淨土思想の起源
- (二) 西方淨土思想と現存藏經
- (三) 無量壽經の成立年代について
- (四) 遍十萬億仏土について
- (五) 龍樹の西方淨土思想
- (六) 天親の西方淨土思想
- (七) 曇恵の西方淨土思想
- (八) 道綽の西方淨土思想
- (九) 善導の西方淨土思想

(一)

以下淨土教の研究問題として仏身論、仏土論、救根論、生因論、行論等頁の他問題は種々

あるであらうが、今仏身、仏土論は見方によつては指方立相の教義となり、導導即寂老土の説となるのである。又その見方に依つて生因も異り、我根も異なるのであるから仏身仏土の問題は、淨土教義上重要な問題であり、又基本的な問題となつてゐる。

抑、淨土門の綱格なる指方立相の語は、支那の古導大師に始まるのであるが、その思想として起源は遠く印度に遡る等が出来ると思ふ。従つて、今西方淨土思想の起源が那邊にあるか、又それは何時頃からいつて考察を進めたい。

従来これについて諸學者によつて研究が試みられて来たが、しかしこれらの説は或は「極樂淨土思想は大治見王經より脱化し来つたものにして、阿鉢陀仏は即ち彼の在宏世界の主たる大治見王の一転したるものなり」とし、更に「転輪聖王なる大治見王を以つて日輪の擬人となし、西方淨土思想が太陽神話に起源するものである事を述べ、或は阿鉢陀仏及びその淨土の思想は元、印度に發生せしものに非ずして、ハシマニ教の思想が南方に伝播し、カシミラの仏教に遷轉し、遂に後世の淨土教義を産出せり」とし、或は又面から東への民族大移動により西方をば、祖先の住する樂天地とする民族心理から起れるものとしてゐるが、これらの説は何れも確定的なものにあらずして、推定の域を脱しないものである。これは全く印度の宗教史及び社会史が暗黒にしてその明瞭さをかき、研究の困難なる争が原因するものであらうか。

(二)

次に現存せる經典について論を進めたい。阿鉢陀仏及びその淨土の争を説ける現存經二百數十部の中、一部を通じて専ら弥勒の淨土を説けるは淨土所依の三部經である。この三部の中

、最も成立の早いと考えられるものは無量壽經である。然るにこの無量壽經と同時代か又は少し早く成立したと思われる阿闍世王經には、東方阿闍世及びその淨土を説き、西方阿闍世に闕しては一字も説いていない。しからば西方淨土思想も大抵無量壽經とほぼ成立年代及び地域を同じくする。

(三)

今無量壽經の成立年代及び地方を考察するに、これについて從來異説あり、學者間に尙問題あり。あうが諸説を綜合すると、大体、西北印度即ちカシミールとかガンタラとかの地名を有する地方に於いて、西紀一二世紀の間に成立したと云うのが一番總當なようである。

(四)

次に西方極樂までの距離、過十萬億仏土の數量についても興味をそゝられるのであるが、これは古代印度人の宇宙觀にその起源を見る事が出来るのである。

(五)

次に於いて、印度、支那、日本と淨土の祖師方の西方淨土觀を冠てゆきたい。先づ般若空思想と根柢とされる龍樹は、十住毘婆沙論の中に淨土の十相を説いてゐる。即ち、(一)得白菩提、(二)仏功徳力、(三)法具足、(四)声聞具足、(五)菩提樹具足、(六)世界莊嚴、(七)衆生利益、(八)可度具足、(九)大衆集會、(十)仏具足の十相である。これは即ち華嚴經の緣起思想に立脚せる十地行願の類

相であるが、師の他の著述等合せ考えるに、師は結局弥勒の願力所成の淨土なることを説いて
あられる様である。

(六)

竜樹が主として般若に依られたのに対して、瑜伽派の祖師と云われる天親の西方淨土觀を冠
るに、淨土とは三種二十九句の功德莊嚴に分て組織づけられている。(これは龍無著の十八四
清の淨土觀相に依られたものであるか)そして三種二十九句の功德莊嚴は、一法句に略入し、
一法句とは清淨句であり、清淨句とは眞實智慧悲愍法身なる事を説いてあられる。又この二十
九種の中、無量壽仏の所行以としての十七種の國土莊嚴をば、才一義諦妙妙界相と規定されて
いる事、及びそれをもつて觀察の対象とする事等は、勝義を有^レずる瑜伽行派の思想を背景とす
るものであり、竜樹の淨土觀とは悉に前異なるを知るものである。

(七)

竜樹の教學を以つて、天親の往生論を被された星島は、師の著述の所々に於いて緣起の實相
がそのまゝ、如來の願力所成の淨土なる所以を説いておられる。即ち凡そは信仏の因緣により救
済されることが説かれ、實相緣起の姿がそのまゝ一切の物を攝言し、生成變化せしめずにはあ
かないと言う如來大悲の本願力の姿であり、法性實相の姿がそのまゝ願力所成の淨土である。
この教學に立たれたのである。

こうした星島の淨土觀に於いて特に注目すべき^は広闡相入説である。そしてこの思想は淨土觀

に理論的根據を与えるものである。即ち淨土の本質と莊嚴の關係を理論付けるものであり、
又とは三密二十九種の莊嚴相を云い、密とは入一法句を云う。又玄密は三密二十九種と一法句
との關係を顯すもので、密門と同一法句であり、清淨句であり、眞實智慧應法身である事を
説かれている。

如斯論註を通じて見られる要點の淨土思想は、有相莊嚴の淨土を本願緣起の姿と見、眞實智
慧無爲法身の姿を願力所成の姿と受容された様である。

(八)

道綽の西方淨土思想を知るには、安樂集二卷による外はないであらう。今、安樂集に説かれ
た師の淨土觀を一言にして云えは、西方報土説を主張されたものと云えるか。次に本集の要
を述べる。

(一) 西方淨土とは、「現在、沐浴、是報仏極樂、宝莊嚴國是報土」(淨金工・六七六)と云われ、
又、「今此無量壽國、是其報淨土」と云つて居られる。

(二) 又、淨土は凡聖通性である事を説かれている。

(三) 又、衆中淨土の方向を示して西方と云い、西方淨土の建立は法華の願心に存すること
主張されている。これにより指方立相と云う事が單なる方便ではなく、事實の存在なりと思惟
された様である。

如是、綽師に於て既に西方淨土を報土とする見方、及び指方立相思想が芽え、指導への系地
をなした事が窺われる。

呂導は道緯から淨土の法を受けて大いに他方本願を鼓吹され、特に仏の本願を重じ、その本願により凡夫も報身報土に入る事が出来る、と説かれ、願力を骨子とし凡入報土の淨土教義を組織づけられたのである。

大師は弥勒をば、「是報非化」と云い、「今此觀門等唯指方立相住心而取以總不明無相離念也如未懸知未代罪濁凡夫立相住心尚不離得何況離相而未爭吾相似無行通人居空立舍也」(淨土 2・四七下)とあるにより、大師の指方立相思想は明かである。尚、他にも淨土についての阿題は種々あるが、要するに大師は凡夫の枝根の上に立つた淨土を説かれたのであつて、即ち具體的な、家徽的な淨土、即ち指方立相の淨土を説かれ、その淨土が凡夫に入り得る報身報土なる事を主張されたのである。